

日蓮大聖人御書全集

ほつけしゆようしやう

法華取要抄

新版
148
ゝ
159

ほつけしゅようしやう

法華取要抄

ぶんえい ねん

文永11年（'74）

がつ か

5月24日

さい

53歳

ときじやうにん

富木常忍

ふそうしやもんちれん

の

扶桑沙門日蓮これを述ぶ。

そ おも

夫れ以んみれば、

がつしさいてん

かんど

にほん

とらい

月支西天より漢土・日本に渡来すると

きやうろん

ごせん

しちせんよかん

なか

しよきやうろん

ころの経論、五千・七千余卷なり。その中の諸経論の

しやうれつ

せんじん

なんい

せんご

じけん

まか

べん

勝劣・浅深・難易・先後は、自見に任せてこれを弁ぜんと

ぶん

およ

ひと

したが

しゆう

よ

し

すれば、その分に及ばず。人に随い宗に依つてこれを知ら

ぎふんび

んとすれば、その義紛紜す。

けごんしゆうい

いっさいきやう

なか

きやうだいいち

いわゆる、華嚴宗云わく「一切経の中にこの経第一」。

ほつそうしゅうい

いつさいきよう

なか

じんみつきようだいichi

さんろんしゅうい

法相宗云わく「一切経の中に深密経第一」。三論宗云わ

いつさいきよう

なか

はんにゃきようだいichi

しんこんしゅうい

いつさいきよう

く「一切経の中に般若経第一」。真言宗云わく「一切経

なか

だいにち

さんぶきようだいichi

ぜんしゅうい

い

の中に大日の三部経第一」。禅宗云わく、あるいは云わく

きようない

りようがきようだいichi

い

しゅりようこんきよう

「教内には楞伽経第一」、あるいは云わく「首楞嚴経

だいichi

い

きようげべつでん

しゅう

じようどしゅうい

第一」、あるいは云わく「教外別伝の宗なり」。浄土宗云わ

いつさいきよう

なか

じようどさんぶきよう

まつぼう

い

ききようそうおう

く「一切経の中に浄土三部経、末法に入つては機教相応し

だいichi

くしゃしゅう

じようじつしゅう

りつしゅうい

しあこん

て第一」。俱舍宗・成実宗・律宗云わく「四阿含ならび

りつろん

ぶつせつ

けこんきよう

ほけきようとう

ぶつせつ

げどう

に律論は仏説なり。華嚴経・法華経等は仏説にあらず、外道

きよう

い

い

の経なり」。あるいは云わく、あるいは云わく。

かれがれ しゅうじゅう がんそとう とじゅん ちごん ほうぞう ちようかん

しかるに、彼々の宗々の元祖等、杜順・智儼・法蔵・澄観、

げんじよう じおん かじよう どうろう ぜんむい こんごうち ふくう どうせん

玄奘・慈恩、嘉祥・道朗、善無畏・金剛智・不空、道宣・

がんじん どんらん どうしやく ぜんどう だるま えかとう さんぞう

鑑真・曇鸞・道綽・善導、達磨・慧可等なり。これらの三蔵・

だいしとう みな しょうにん けんじん ち にちがつ ひと とく

大師等は皆、聖人なり賢人なり。智は日月に齊しく、徳は

しかい わた うえ おのおの きよう りつ ろん よ

四海に弥れり。その上、各々、経・律・論に依り、たがい

しょうこ あ おうしんくに かたむ どみん あお

に証拠有り。したがって、王臣国を傾け、士民これを仰ぐ。

まつせ へんかく ぜ ひ くわ ひとしんよう いた

末世の偏学たとい是非を加うとも、人信用するに至らず。

ほうざん きた のぼ がしやく さいしゆ せんだん

しかりといえども、宝山に來り登って瓦石を採取し、梅檀

あゆ い いらん いた おさ けこん あ ゆえ ばんにん

に歩み入って伊蘭を懷き収めば、悔恨有らん。故に、万人の

そし ず 謗りを捨てて、みだりに取捨を加う。わ もんてい いさい
我が門弟、委細にこ

じんとう
れを尋討せよ。

そ しょしゅう にんしとう くやく きょうろん み しんやく

夫れ、諸宗の人師等、あるいは旧訳の経論を見て新訳の

せいてん み しんやく きょうろん み くやく す お

聖典を見ず、あるいは新訳の経論を見て旧訳を捨て置き、

じしゅう しゅうじやく ま こぎ したが ぐけん しろ

あるいは自宗に執著し、曲げて己義に随い、愚見を注し

とど こうだい かてん くいぜ おどろ さわ うさぎ たず

止めて後代にこれを加添す。株杭に驚き騒いで兎獣を尋ね

もと ち えんせん はつ あお げんげつ み ひ す り

求め、智、円扇に発して、仰いで天月を見る。非を捨て理を

と ちじん

取るは智人なり。

いま まつ ろんじ ほん にんし じやぎ す お もつぱ

今、末の論師・本の人師の邪義を捨て置いて、専ら

ほんきよう　ほんろん　ひ　み　ごじゅうよねん　しよきよう　なか　ほけきよう

本經・本論を引き見るに、五十余年の諸經の中に、法華經

だいし　ほっしほん　なか　いこんとう　さんじ　もつと　だいいち　もろもろ

第四の法師品の中の「已今当」の三字、最も第一なり。諸

ろんじ　もろもろ　にんし　さだ　きようもん　み

の論師・諸の人師、定めてこの經文を見けるか。しかり

そうじ　きようもん　くる　ほんし

といえども、あるいは相似の經文に狂い、あるいは本師の

じやえ　しゅう　おうしんとう　きえ　おそ

邪会に執し、あるいは王臣等の帰依を恐るるか。

こんこうみようきよう　しよきよう　おう　みつごんきよう

いわゆる、金光明經の「これ諸經の王なり」、密嚴經

いつさいきよう　なか　すぐ　ろくはらみつきよう　そうじだいいち

の「一切經の中に勝れたり」、六波羅蜜經の「総持第一」、

だいにちきよう　ぼだい　けごんきよう　よ　きよう　しん

大日經の「いかんが菩提」、華嚴經の「能くこの經を信ず

もつと　かた　はんにやきよう　ほっしよう　えにゆう　いちじ

るは最もこれ難し」、般若經の「法性に会入し、一事を

も見ず」、大智度論の「般若波羅蜜は最も第一なり」、涅槃論
の「今日、涅槃の理は」等なり。

これらの諸文は法華經の「已今当」の三字に相似せる文な

り。しかりといえども、あるいは梵帝・四天等の諸經に對当

すればこれ諸經の王なり。あるいは小乗經に相對すれ

ば諸經の中の王なり。あるいは華嚴・勝鬘等の經に相對

すれば一切經の中に勝れたり。全く五十余年の大小・

權實・顯密の諸經に相對してこれ諸經の王の大王なるに

あらず。詮ずるところは、所對を見て經々の勝劣を弁う

べきなり。ごうてき ふ ふく はじ だいりき ちけん
強敵を臥せ伏して始めて大力を知見すとはこれなり。

うえ しよきよう しようれつ しゃくそんいちぶつ せんじん まった
その上、諸経の勝劣は、釈尊一仏の浅深なり、全く
たほう ふんじんじよこん くわ しせつ くじ こん
多宝・分身助言を加うるにあらず。私説をもつて公事に混ず
ることなかれ。

しよきよう にじよう ほんぷ たいよう しようじようきよう えんぜつ
諸経は、あるいは二乗・凡夫に対揚して小乗経を演説
もんじゆ げだつがつ こんごうさったとう たいこう ぐでん ぼさつ
し、あるいは文殊・解脱月・金剛薩埵等に対向す。弘伝の菩薩
まった じゆせんがい じようぎようとう
は、全く地涌千界の上行等にはあらず。

いま ほけきよう しよきよう あいたい いちだい ちようか
今、法華経と諸経とを相對するに、一代に超過すること

にじつしゅ あ 二十種これ有り。その中、なか 最要二つ有り。さいようふた いわゆる三・五の さん にほう ご

二法なり。

さん

さんぜんじんてんこう

しよきよう

しやくそん

いんい

三とは三千塵点劫なり。諸経はあるいは釈尊の因位を

あ

さんぎ

どうゆじんこう

明かすこと、あるいは三祇、あるいは動逾塵劫、あるいは

むりようこう

ぼんのうい

ど

にじゅうくこう

このかた

無量劫なり。梵王云わく、この土には、二十九劫より已来、

ちぎよう

しゅ

だいろうくてん

たいしやく

してんのうとう

知行の主なり。第六天・帝釈・四天王等も、もつてかくの

しやくそん

ぼんのう

はじ

ちぎよう

せんご

じようろん

ごとし。釈尊と梵王等と、始めは知行の先後これを諍論す。

いっし

あ

ごうぶく

こんかた

しかりといえども、一指を挙げてこれを降伏してより已来、

ぼんでんこうべ

かたむ

まおうたなごころ

あ

さんがい

しゅじよう

梵天頭を傾け魔王掌を合わせ、三界の衆生をして

しゃくそん きぶく

釈尊に帰伏せしむる、これなり。

しよぶつ いんい しゃくそん いんい きゆうめい

また諸仏の因位と釈尊の因位とこれを糾明するに、

しよぶつ いんい さんぎ ごこうとう しゃくそん

諸仏の因位は、あるいは三祇、あるいは五劫等なり。釈尊

いんい すで さんぜんじんてんごう このかた しゃばせかい いっさいしゅじよう

の因位は既に三千塵点劫より已来、娑婆世界の一切衆生の

けちえん だいじ せかい ろくどう いっさいしゅじよう たど ほか

結縁の居士なり。この世界の六道の一切衆生は、他土の他

ぼさつ うえん ものいちにん な ほけきよう い とぎ

の菩薩に有縁の者一人もこれ無し。法華經に云わく「その時

ほう き もの おのおのしよぶつ みもと あ とううんぬん てんだい

法を聞きし者は、各諸仏の所に在り」等云々。天台云わ

さいほう ほとけぶつ えんこと ゆえ しふ ようじよう とう

く「西方は仏別にして縁異なり。故に子父の義成ぜず」等

うんぬん みようらくい みだ しゃか にぶつすで こと

云々。妙樂云わく「弥陀・釈迦の二仏既に殊なり○いわん

むかし えんべつ

けどうおな

けちえん しょう

や、宿昔の縁別にして化導同じからざるをや。結縁は生の

じょうじゆく よう

しょう よう えんこと

ふし

ごとく、成熟は養のごとし。生・養の縁異なれば、父子

じょう どううんぬん どうせいにほんこく いっさいしゅじょう みだ らいごう たも

成ぜず」等云々。当世日本国の一切衆生、弥陀の来迎を待

たと うし こ うま にゆう ふく かわら かがみ てんげつ

つは、譬えば、牛の子に馬の乳を含め、瓦の鏡に天月を

う

浮かべんがごとし。

かい

ろん

しよぶつによらい

また果位をもつてこれを論ずれば、諸仏如来、あるいは

じつこう ひやつこう せんごういらい かこ ほとけ きようしゅしやくそん すで

十劫・百劫・千劫已来の過去の仏なり。教主釈尊は、既

ごひやくじんてんごう このかた みようかくかまん ほとけ

に五百塵点劫より已来、妙覚果満の仏なり。

だいにちによらい あみだによらい やくしによらいとう じんじつぼう しよぶつ われ

大日如来・阿弥陀如来・薬師如来等の尽十方の諸仏は、我

ほんし きようしゆしやくそん しよじゅうとう

てんげつ ばんみず う

らが本師・教主釈尊の所従等なり。天月の万水に浮かぶ

けこんきよう じつぼう だいじよう びるしやな だいにちきよう

とはこれなり。華嚴經の十方の台上の毘盧遮那、大日經・

こんごうちようきよう りようかい だいにちによらい ほうとうほん たほうによらい さゆう

金剛頂經の両界の大日如来は、宝塔品の多宝如来の左右

わき れい よ おう りようしん たほうぶつ

の脇なり。例せば、世の王の両臣のごとし。この多宝仏も

じゆうりようほん きようしゆしやくそん しよじゅう ど われ しゆじよう

寿量品の教主釈尊の所従なり。この土の我ら衆生は、

ごひやくじんてんごう このかた きようしゆしやくそん あいし ふこう とが

五百塵点劫より已来、教主釈尊の愛子なり。不孝の失に

いま かくち たほう しゆじよう に

よつて今に覚知せずといえども、他方の衆生には似るべか

うえん ほとけ けちえん しゆじよう たと てんげつ せいすい う

らず。有縁の仏と結縁の衆生とは、譬えば天月の清水に浮

むえん ほとけ しゆじよう たと ろうしや いかずち

かぶがごとく、無縁の仏と衆生とは、譬えば聾者の雷の

こえ き もうしや にちがつ む
声を聞き、盲者の日月に向かうがごとし。

しかるに、ある人師は釈尊を下して大日如来を仰崇し、

ある人師は世尊は無縁なり阿弥陀は有縁なりと。ある人師
い しょうじよう しゃくそん けごんきよう しゃくそん
ある人師は世尊は無縁なり阿弥陀は有縁なりと。ある人師

云わく、小乗の釈尊と。あるいは華嚴經の釈尊と。あ
ほけきようしゃくもん しゃくそん しょし
云わく、小乗の釈尊と。あるいは華嚴經の釈尊と。あ

るいは法華經迹門の釈尊と。これらの諸師ならびに檀那
どう しゃくそん わす しょうぶつ と しゃくそん だんな
るいは法華經迹門の釈尊と。これらの諸師ならびに檀那

等、釈尊を忘れて諸仏を取ることとは、例せば、阿闍世太子
びんばしゆらおう ころ しゃくそん そむ だいばだった つ
等、釈尊を忘れて諸仏を取ることとは、例せば、阿闍世太子

の頻婆沙羅王を殺し釈尊に背いて提婆達多に付きしがご
にがつじゅうごにち しゃくそんごにゆうめつ ひ ないしじゅうにがつ
の頻婆沙羅王を殺し釈尊に背いて提婆達多に付きしがご

ときなり。二月十五日は釈尊御入滅の日、乃至十二月の
じゅうごにち さんがい じふ ごおんき ぜんどう ほうねん ようかんとう
ときなり。二月十五日は釈尊御入滅の日、乃至十二月の

十五日も三界の慈父の御遠忌なり。善導・法然・永觀等の
十五日も三界の慈父の御遠忌なり。善導・法然・永觀等の

だいばだった たばら

提婆達多に誑かされて、阿弥陀仏の日と定め了わんぬ。

しがつようか せそんごたんじよう ひ やくしぶつ と お

四月八日は世尊御誕生の日なり。薬師仏に取り了わんぬ。我

じふ きにち たぶつ か こうよう もの

が慈父の忌日を他仏に替うるは孝養の者なるか、いかん。

じゆりようほん い われ よ ちち おうじ じ

寿量品に云わく「我もまたこれ世の父」「狂子を治せんが

ゆえ とううんぬん てんだいだいしい もと ほとけ したが

ための故に」等云々。天台大師云わく「本この仏に従つ

はじ どうしん おこ ほとけ したが ふたいじ じゆう

て初めて道心を発し、またこの仏に従つて不退地に住す

ないし ひやくせん まさ うみ そそ えん ひ

乃至なお百川の応須に海に潮ぐべきがごとく、縁に牽かれ

おうしよう とううんぬん

て応生すること、またかくのごとし」等云々。

と い ほけきよう たれびと と

問うて曰わく、法華経は誰人のためにこれを説くや。

こた い ほうべんぽん にんきほん いた はつぽん
答えて曰わく、方便品より人記品に至るまでの八品に

にい あ かみ しも む しだい よ だいいち

二意有り。上より下に向かつて次第にこれを読まば、第一は

ぼさつ だいに にじよう だいさん ぼんぷ あんらくぎよう かんじ

菩薩、第二は二乗、第三は凡夫なり。安樂行より勸持・

だいば ほうとう ほつし ぎやくじ よ めつご しゅじよう

提婆・宝塔・法師と逆次にこれを読まば、滅後の衆生をも

ほん ざいせ しゅじよう ぼう めつご

つて本となす。在世の衆生は傍なり。滅後をもつてこれを

ろん しょうほう いっせんねん ぞうほう いっせんねん ぼう まつぼう

論ぜば、正法一千年・像法一千年は傍なり。末法をもつて

しょう まつぼう なか にちれん しょう

正となす。末法の中には、日蓮をもつて正となすなり。

と い しょうこ

問うて曰わく、その証拠いかん。

こた い めつご のち もん

答えて曰わく、「いわんや滅度して後をや」の文これなり。

うたが い 疑つて云わく、日蓮を正となす正文いかん。

こた い 答えて云わく、「諸の無智の人の、悪口・罵詈等し、お

とうじよう くわ ものあ とううんぬん よび刀杖を加うる者有らん」等云々。

と い 問うて云わく、自讃はいかん。

こた い 答えて曰わく、喜び身に余るが故に、堪え難くして自讃

するなり。

と い 問うて曰わく、本門の心いかん。

こた い 答えて曰わく、本門において二つの心有り。一には、

ゆじゆつぽん りやくかいごんけんのん ぜんしみ しやくもん しよしゆ 涌出品の略開近顕遠は、前四味ならびに迹門の諸衆をし

だつ

に

ゆじゆつぽん

どうしゆうしようぎ

て脱せしめんがためなり。二には、涌出品の動執生疑より

いっばん

じゆりようほん

ふんべつくだくほん

はつぽん

いじよういっぽんにはん

一半、ならびに寿量品、分別功德品の半品、已上一品二半

こうかいごんけんのん

な

いっこう

めつご

を、広開近顕遠と名づく。一向に滅後のためなり。

と

い

りやくかいごんけんのん

こころ

問うて曰わく、略開近顕遠の心いかん。

こた

い

もんじゆ

みろくとう

しよだいぼさつ

ぼんてん

たいしやく

答えて曰わく、文殊・弥勒等の諸大菩薩、梵天・帝釈・

にちがつ

しゆしやう

りゆうおうとう

しよじやうどう

とき

はんにやきよう

いた

このかた

日月・衆星・竜王等、初成道の時より般若経に至る已来

いちにん

しやくそん

みでし

ぼさつ

てんにん

は、一人も釈尊の御弟子にあらず。これらの菩薩・天人は、

しよじやうどう

とき

ほとけ

せつぽう

いぜん

初成道の時、仏いまだ説法したまわざるより已前に、

ふしぎげだつ

じゆう

われ

べつ

えんにきよう

えんぜつ

しやくそん

不思議解脱に住して、我と別・円二教を演説す。釈尊そ

のち あごん ほうどう ほんにや せんぜつ

の後に、阿含・方等・般若を宣説したもう。しかりといえ

まった まった しよにん とくぶん

ども、全くこれらの諸人の得分にあらず。既に別・円二教

し ぞう つう し しょう れつ か

を知りぬれば、蔵・通をもまた知れり。勝は劣を兼ねる、

いさい ろん しゃくそん ししやう

これなり。委細にこれを論ぜば、あるいは釈尊の師匠なる

ぜんちしき しゃくそん したが ほけきやう

か。善知識とはこれなり。釈尊に随うにあらず。法華經の

しゃくもん はつぽん らいし はじ みもん ほう き

迹門の八品に来至して、始めて未聞の法を聞いて、これら

ひとびと でし な しやりほつ もくれんとう ろくおん このかた

の人々は弟子と成りぬ。舍利弗・目連等は、鹿苑より已来、

しよほつしん でし こんぼう ゆる

初発心の弟子なり。しかりといえども、權法のみを許せり。

いま ほけきやう らいし じつぼう じゆよ ほけきやう ほんもん

今、法華經に来至して実法を授与す。法華經本門の

りやくかいごんけんのん

らいし

けごん

だいぼさつ

にじよう

だいぼんてん

略開近顕遠に來至して、華嚴よりの大菩薩・二乗・大梵天・

たいしやく

にちがつ

してん

りゆうおうとう

くらいみようかく

とな

みようかく

帝釈・日月・四天・竜王等は、位妙覺に隣り、また妙覺

くらしい

い

いま

われ

てん

む

の位に入るなり。もししかれば、今、我ら天に向かつてこ

み

しょうじん

みようかく

ほとけ

ほんい

こ

しゅじよう

りやく

れを見れば、生身の妙覺の仏、本位に居して衆生を利益

する、これなり。

と

い

たればと

こうかいごんけんのん

じゅりようほん

えんぜつ

問うて曰わく、誰人のために広開近顕遠の寿量品を演説

するや。

こた

い

じゅりようほん

いっぽんにはん

はじ

お

答えて曰わく、寿量品の一品二半は、始めより終わりに

いた

まさ

めつご

しゅじよう

めつご

なか

至るまで、正しく滅後の衆生のためなり。滅後の中には、

まつぼうこんじ にちれんとう

末法今時の日蓮等がためなり。

うたが

い

ほうもん

ぜんだい

き

疑つて云わく、この法門、前代にいまだこれを聞かず。

きようもん

あ

経文にこれ有りや。

こた

い

よ

ち

ぜんけん

こ

きようもん

ひ

答えて曰わく、予が智、前賢に超えず。たとい経文を引

たればと

しん

べんか

ていきゆう

ごししよ

くといえども、誰人かこれを信ぜん。卞和が啼泣、伍子胥

ひしよう

が悲傷これなり。

りやくかいごんけんのん

どうしゆうしやうぎ

もん

い

しかりといえども、略開近顕遠・動執生疑の文に云わ

もろもろ

しんぼつち

ぼさつ

ほとけめつ

のち

く「しかも諸の新発意の菩薩は、仏滅して後において、

ことば

き

しんじゆ

ほう

は

もしこの語を聞かば、あるいは信受せずして、法を破する

ざいごう いんねん お どううんぬん もん こころ じゆりようほん と

罪業の因縁を起こさん」等云々。文の心は、寿量品を説か

まつだい ぼんぷ みな あくどう お どう じゆりようほん

ずんば、末代の凡夫、皆、悪道に堕ちん等なり。寿量品に

い よ りようやく いまとど お どううんぬん

云わく「この好き良薬を、今留めてここに在く」等云々。

もん こころ かみ かこ と に

文の心は、上は過去のことを説くに似たるようなれども、

もん あん めつご ほん

この文をもつてこれを案ずるに、滅後をもつて本となす。

せんれい ひ

まず先例を引くなり。

ふんべつくだくほん い あくせまつぼう とき どううんぬん じんりきほん い

分別功德品に云わく「悪世末法の時」等云々。神力品に云

ほとけめつど のち よ きよう たも ゆえ

わく「仏滅度して後に、能くこの経を持たんをもつての故

しよぶつ みなかんぎ むりよう じんりき げん どううんぬん

に、諸仏は皆歡喜して、無量の神力を現じたもう」等云々。

やくおうほん い われめつど のち のち ごひやくさい うち えんぶだい

薬王品に云わく「我滅度して後、後の五百歳の中、閻浮提に

こうせんる ふ だんぜつ とううんぬん い

広宣流布して、断絶せしむることなけん」等云々。また云わ

きよう すなわ えんぶだい ひと やまい ろうやく とう

く「この経は則ちこれ閻浮提の人の病の良薬なり」等

うんぬん ねはんぎよう い たと しちし ふ びようどう

云々。涅槃経に云わく「譬えば、七子あり、父母平等なら

びようじや こころすなわ

ざるにあらざれども、しかも病者において心即ちひとえ

おも とううんぬん しちし なか だいいち だいに いっせんだい

に重きがごとし」等云々。七子の中の第一・第二は、一闍提・

ほうぼう しゅじよう しょうびよう なか ほけきよう ぼう だいいち

謗法の衆生なり。諸病の中には法華経を謗ずるが第一の

じゅうびよう しょうやく なか なんみようほうれんげきよう だいいち ろうやく

重病なり。諸薬の中には南無妙法蓮華経は第一の良薬な

り。

いちえんぶだい　じゅうこうしちせんゆぜんな　はちまん　くに　あ
この一閻浮提は縦広七千由善那、八万の国これ有り。

しょうぞうにせんねん　あいだ　こうせん　る　ふ　ほけきよう　とうせい

正像二千年の間、いまだ広宣流布せざる法華経を当世に

あ　る　ふ　しやくそん　だいもうご　ほとけ　たほうぶつ

当たって流布せしめずんば、釈尊は大妄語の仏、多宝仏の

しょうみよう　ほうまつ　おな　じつぼうふんじん　ほとけ　じよぜつ　ばしろう

証明は泡沫に同じく、十方分身の仏の助舌も芭蕉のごと

くならん。

うたが　い　たほう　しょうみよう　じつぼう　じよぜつ　じゆ　ゆじゆつ

疑って云わく、多宝の証明、十方の助舌、地涌の涌出、

たればと

これらは誰人のためぞや。

こた　い　せけん　じよう　い　ざいせ　にちれん

答えて曰わく、世間の情に云わく、在世のためと。日蓮

い　しやりほつ　もつけんとう　げんざい　ろん　ちえ

云わく、舍利弗・目犍等は、現在をもつてこれを論ぜば、智慧

だいいち じんずうだいいち だいしよう

かこ

ろん

第一・神通第一の大聖なり。過去をもつてこれを論ぜば、

こんりゆうだぶつ しょうりゆうだぶつ

みらい

ろん

けこう

金竜陀仏・青竜陀仏なり。未来をもつてこれを論ぜば華光

によらい りようぜん

ろん

さんわくとんじん

だいぼさつ

ほん

如来、靈山をもつてこれを論ぜば三惑頓尽の大菩薩、本を

ろん

ないひげげん

こぼさつ

もんじゅ

みろくとう

もつてこれを論ぜば内秘外現の古菩薩なり。文殊・弥勒等の

だいぼさつ

かこ

こぶつ

げんざい

おうしよう

ぼんたい

にちがつ

してん

大菩薩は過去の古仏、現在の応生なり。梵帝・日月・四天

とう しよじょういぜん だいしよう

うえ

ぜんしみ

しきよう

いちごん

等は初成已前の大聖なり。その上、前四味・四教、一言に

さと

ほとけ

ざいせ

いちにん

むち

もの

これを覚りぬ。仏の在世には一人においても無智の者これ

な たればと うたが

は

たほうぶつ

しょうみよう

か

無し。誰人の疑いを晴らさんがために多宝仏の証明を借

しよぶつした い

じゅ

ぼさつ

め

かたがた

いわ

り、諸仏舌を出だし、地涌の菩薩を召さんや。方々もつて謂

きようもん

めつど

れなきことなり。したがって、経文に「いわんや滅度して

のち ほう ひさ じゆう どううんぬん

後をや」「法をして久しく住せしむ」等云々。これらの経文

あん われ

をもつてこれを案ずるに、ひとえに我らがためなり。した

てんだいだいしとうせい さ い のち ごひやくさい とお

がつて、天台大師当世を指して云わく「後の五百歳、遠く

みようどう うるお でんぎようだいしとうせい しる い しようぞう

妙道に沾わん」。伝教大師当世を記して云わく「正像や

す お まつぽう ちか あ どううんぬん まつぽう

や過ぎ已わつて、末法はなはだ近きに有り」等云々。「末法

た う ごん まつぽう ちか あ ごじ わ よ

太有近（末法はなはだ近きに有り）」の五字は、我が世は

ほけきようる ふ よ しゃく

法華経流布の世にあらずという釈なり。

と い によらい めつごにせんよねん りゆうじゆ てんじん てんだい

問うて云わく、如来の滅後二千余年、竜樹・天親・天台・

でんぎよう のこ

ひほう なにもの

伝教の残したまえるところの秘法は何物ぞや。

こた い ほんもん ほんぞん かいだん だいもく ごじ

答えて曰わく、本門の本尊と戒壇と題目の五字となり。

と い しょうぞうとう なん ぐつう

問うて曰わく、正像等に何ぞ弘通せざるや。

こた い しょうぞう ぐつう しょうじよう

答えて曰わく、正像にこれを弘通せば、小乗・

ごんだいじよう しゃくもん ほうもん いちじ めつじん

権大乘・迹門の法門、一時に滅尽すべきなり。

と い ぶつぽう めつじん ほう なん ぐつう

問うて曰わく、仏法を滅尽するの法、何ぞこれを弘通せ

んや。

こた い まっほう だいしろう ごんじつ けんみつとも きよう

答えて曰わく、末法においては大小・権実・顕密共に教

あ とくどうな いちえんぶだい みな ほうぼう お

のみ有つて得道無し。一閻浮提、皆、謗法となり了わんぬ。

ぎやくえん

みようほうれんげきよう

ごじ

かぎ

れい

逆縁のためには、ただ妙法蓮華經の五字に限るのみ。例

ふきようほん

わ もんてい じゆんえん

にほんこく

ぎやくえん

せば不輕品のごとし。我が門弟は順縁なり。日本国は逆縁

なり。

うたが

い

なん

こう

りやく

す

よう

と

疑つて云わく、何ぞ広・略を捨てて要を取るや。

こた

い

げんじようさんぞう

りやく

す

こう

この

しじっかん

答えて曰わく、玄奘三藏は略を捨てて広を好み、四十卷

だいほんきよう

ろっぴやくかん

な

らじゅうさんぞう

こう

す

りやく

この

の大品經を六百卷と成す。羅什三藏は広を捨てて略を好

せんかん

だいろん

ひやつかん

な

み、千卷の大論を百卷と成せり。

にちれん

こう

りやく

す

かんよう

この

じようぎようぼさつ

日蓮は広・略を捨てて肝要を好む。いわゆる、上行菩薩

しよでん

みようほうれんげきよう

ごじ

きゆうほういん

うま

そう

ほう

所伝の妙法蓮華經の五字なり。「九方堙が馬を相するの法

げんこう りやく しゅんいつ と しどうりん きよう こう

は玄黄を略して駿逸を取り、支道林が経を講ずるには

さいか す がい と とううんぬん ほとけすで ほうとう い

細科を捨てて元意を取る」等云々。仏既に宝塔に入つて

にぶつぎ なら ふんじんらいじゆう じゆ め い かんよう と

二仏座を並べ、分身来集し、地涌を召し出だし、肝要を取

まつだい あ ごじ じゆよ どうせい いぎ あ

つて末代に当てて五字を授与せんこと、当世異義有るべか

らず。

うたが い こんぜ ほう る ふ せんそう あ

疑つて云わく、今世にこの法を流布せば、先相これ有り

や。

こた い ほけきよう によぜそうないしほんまつくきようとう うんぬん

答えて曰わく、法華経に「如是相乃至本末究竟等」云々。

てんだい い ちちゆ か よろこ ごときた かんじゃくな きやくじん

天台云わく「蜘蛛掛かつて喜び事来り、鴉鵲鳴いて客人

きた しょうじ

来る。小事すらなおもつてかくのごとし。いかにいわんや

だいじ しゅい

大事をや」取意。

と い そろ あ

問うて曰わく、もししからば、その相これ有りや。

こた い しょうかねんちゅう おおじしん ぶんえい だいすいせい

答えて曰わく、去ぬる正嘉年中の大地震、文永の大彗星、

い ご いま しゅじゅ おお てんぺんちよう

それより已後、今に種々の大いなる天変地天、これらはこ

せんそう にんのうきよう しちなん にじゅうくなん むりよう なん

の先相なり。仁王経の七難・二十九難・無量の難、

こんこうみようきよう だいじつきよう しゅごきよう やくしきようとう しよきよう あ

金光明経・大集経・守護経・薬師経等の諸経に挙ぐる

しよなん みな あ な に さん

ところの諸難、皆これ有り。ただし、無きところは二・三・

し ご ひい だいなん ことし さどのくに どみん

四・五の日出ずる大難なり。しかるを、今年、佐渡国の土民

くちぐち

い

ことしししょうがつにじゅうさんにち

さるのとき

にし

かた

ふた

口に云わく「今年正月二十三日の申時、西の方に二つ

ひしゅつげん

い

みつ

ひしゅつげん

とううんぬん

の日出現す」。あるいは云わく「三つの日出現す」等云々。

にがついつか

とうほう

みようじょうふた

なら

い

ちゅうかん

「二月五日には東方に明星二つ並び出ず。その中間は

さんずん

とううんぬん

だいなん

にほんこくせんだい

三寸ばかり」等云々。この大難は日本国先代にもいまだこ

あ

れ有らざるか。

さいししょうおうきよう

おうぼうししょうろんぼん

い

へんげ

りゅうせいお

ふた

最勝王経の王法正論品に云わく「変化の流星墮ち、二

ひぐじ

い

たほう

おんぞくきた

こくじんそうらん

あ

つの日俱時に、出で、他方の怨賊来つて、国人喪乱に遭わん」

とううんぬん

しゅりようごんぎよう

い

ふた

ひ

み

等云々。首楞嚴経に云わく「あるいは二つの日を見、あ

ふた

つき

み

とう

やくしきよう

い

にちがつはくしよく

るいは両つの月を見る」等。薬師経に云わく「日月薄蝕の

なん とううんぬん こんこうみようきよう

い すいせい

い ふた

難」等云々。金光明経に云わく「彗星しばしば出で、両つ

ひなら げん はくしよくつねな

だいじつきよう

い ぶつぼうじつ

の日並び現じ、薄蝕恒無し」。大集経に云わく「仏法実

おんもつ

ないしにちがつ

みよう

げん

とう

にんのうきよう

い

隠没すれば乃至日月も明を現ぜず」等。仁王経に云わく

にちがつど

うしな

じせつほんぎやく

しやくにちい

こくにち

「日月度を失い、時節返逆し、あるいは赤日出で、黒日

い に

さん し

ご

ひい

ひしよく

ひかりな

出で、二・三・四・五の日出で、あるいは日蝕して光無く、

にちりんいちじゅう

に

さん

し

ごじゅう

りんげん

とううんぬん

あるいは日輪一重、二・三・四・五重の輪現ず」等云々。

にちがつとう

なん

しちなん

にじゅうくなん

むりよう

しよなん

なか

だいいち

この日月等の難は、七難・二十九難・無量の諸難の中に第一

だいいくなん

の大悪難なり。

と い

だいちゅうしょう

しよなん

なに

よ

問うて曰わく、これらの大中小の諸難は、何に因つて

これをお起こすや。

こた

い

さいしやうおうきやう

い

ひほう

ぎやう

もの

答えて曰わく、最勝王経に云わく「非法を行ずる者を

み

まさ

あいぎやう

しやう

ぜんぼう

ぎやう

ひと

くそ

見て当に愛敬を生ずべし。善法を行ずる人において苦楚

じばつ

とううんぬん

ほけきやう

い

ねはんぎやう

い

して治罰せん」等云々。法華経に云わく、涅槃経に云わく。

こんこうみやうきやう

い

あくにん

あいぎやう

ぜんにん

じばつ

よ

金光明経に云わく「悪人を愛敬し善人を治罰するに由る

ゆえ

しやうしゆく

ふうう

みな

とき

おこな

とう

が故に、星宿および風雨、皆、時をもつて行われず」等

うんぬん

だいじつきやう

い

ぶつぼうじつ

おんもつ

ないし

云々。大集経に云わく「仏法実に隠没すれば乃至かくのご

ふぜんこう

あくおう

あくびく

わ

しやうほう

きえ

とう

にんのうきやう

とき不善業の悪王・悪比丘、我が正法を毀壞す」等。仁王経

い

しやうにんさ

とき

しちなんかなら

お

とう

に云わく「聖人去らん時は、七難必ず起こらん」等。ま

た云わく「法にあらざる律にあらざるして比丘を繫縛すること、

ごくしゅう ほう

とき あ

ほうめつ

ひさ

獄囚の法のごとくす。その時に当たつて、法滅せんこと久

とう

い

もろもろ

あくびく

おお

みより

もと

しからず」等。また云わく「諸の悪比丘は、多く名利を求

ごくおう

たいし

おうじ

まえ

みずか

はぶつぼう

いんねん

め、国王・太子・王子の前において、自ら破仏法の因縁、

はごく いんねん

おうわきま

ことば

しんちよう

破国の因縁を説かん。その王別えずしてこの語を信聴せ

とううんぬん

みようきよう

も

とうじ

にほんごく

ひ

む

ん」等云々。これらの明鏡を齎つて当時の日本国を引き向

てんち

う

ふけい

まなこ

かうるに、天地を浮かぶること、あたかも符契のごとし。眼

あ わ もんてい

み

まさ

し

くに

あく

有らん我が門弟はこれを見よ。当に知るべし、この国に悪

びくとうあ

てんし

おうじ

しょうぐんとう

む

ざんそ

くわだ

比丘等有つて、天子・王子・將軍等に向かつて讒訴を企て、

しようにん うしな よ
聖人を失う世なり。

と い ほっしやみったらおう かいしようてんし もりやとう がっし
問うて曰わく、弗舎蜜多羅王・会昌天子・守屋等は月支・

しんたん にほん ぶつぽう めっしつ だいはぼさつ ししそんじやとう さつがい
真旦・日本の仏法を滅失し、提婆菩薩・師子尊者等を殺害す。

とき なん だいなん い
その時、何ぞこの大難を出ださざるや。

こた い さいなん ひと したが だいしようあ しようぞう
答えて曰わく、災難は人に随つて大小有るべし。正像

にせんねん あいだ あくおう あくび くとう げどう もち
二千年の間の悪王・悪比丘等は、あるいは外道を用い、あ

どうし かた じゃしん しん ぶつぽう めっしつ
るいは道士を語らい、あるいは邪神を信ず。仏法を滅失す

だい に とが あさ いま とうせい
ること大なるに似たれども、その科なお浅きか。今、当世の

あくおう あくび く ぶつぽう めっしつ しよう だい う
悪王・悪比丘の仏法を滅失するは、小をもつて大を打ち、

権をもつて実を失う。人心を削つて身を失わず、寺塔を焼
き尽くさずして自然にこれを喪ぼす。その失、前代に超過せ
るなり。

我が門弟これを見て法華經を信用せよ。目を瞋らして鏡

に向かえ。天瞋るは人に失有ればなり。二つの日並び出ず

るは、一国に二りの国王並ぶ相なり。王と王との鬭諍なり。

星の日月を犯すは、臣の王を犯す相なり。日と日と競い出ず

るは、四天下一同の諍論なり。明星並び出ずるは、太子

と太子との諍論なり。

こくどみだ

のち

じょうぎようとう

しょうにんしゅつげん

かくのごとく国土乱れて後に上行等の聖人出現し、

ほんもん

みつ

ほうもん

こんりゅう

いちしてん
しかい
いちどう

本門の三つの法門これを建立し、一四天四海一同に

みようほうれんげきよう

こうせんる
ふうたが

妙法蓮華經の広宣流布疑いなきものか。